
大好きだと言える幸せ

コノエイクノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きだと言える幸せ

【Nコード】

N4583E

【作者名】

コノエイクノ

【あらすじ】

始発前の駅ホーム。ある男と女の会話。特別な話でも、特別な物でもない。ただ、愛のある物語り。（……きつと）

蛍光灯が切れかけている駅のホーム。今時自動改札もなく、電車の到着を知らせる電子掲示板もない。あるのは、一時間に一本しか電車が走っていない錆びたレールと、今にも壊れてしまいそうな木製の所々塗装の剥げた青いベンチ、動いているのか分からない自動販売機だけ。

ホームには誰もいない。始発前の駅に人が居るわけがないんだけど、なんとなく辺りを見回す。見通しのいい町の向こう側は白く濁ったような色をしていた。陽が昇るのだ。昇らないでくれと願った朝日。来ないでくれと祈った始発の電車。

分かってる。俺がどれだけ願おうと、俺がどれだけ祈ろうと、電車は時間通りに来るし、陽は昇る。それを、酷く残酷だと思うのは俺だけですか？

始発電車が来るまで後三十分。長いようで、短い時間。

横を見る。俺と同じ様にベンチに腰掛け、足をぶらぶらと揺らす女の子。白のワンピースを身にまとい、黒のガーデガンをその上に羽織っている。そんな彼女の前にはその身体に不釣り合いな位大きな鞆。ガーデガンから少し覗く小さく白い手には切符が一枚だけ大事そうに握られていた。それは、大きな大学病院がある街までの切符だった。路線図の一番上、一番高い切符。

彼女は、その街に行ってしまう。旅行じゃない。遊びに行くのではない。

生きる時間を、少しだけ伸ばしに行くんだ。

そして、この町にはもう帰ってこない。

「……」

言いたい事がいっぱいあった。最後だから、帰ってこないから。でも、口はまるで縫われてしまったかの様に開かず、ただ横目で彼女を見るだけ。

始発電車が来るまで後二十分。

「先生にね？」

口を開いたのは、彼女だった。普通の女の子より少し高めの、落ち着いた声。

「後一年しか生きられないって言われた時、『ああ……』って思ったんだ。『終わっちゃう』って」

一つ一つをゆっくりと語る彼女。まるで懐かしい思い出のように。

「でも、心のどこかで、ほっとしてる自分がいて。もう痛い思いをしなくていいんだあって」

彼女の顔に笑みが浮かんでいた。目は泣き出しそうで、口元だけが笑っていた。

「……でもさ、君に会えないって思ったら……痛いんだよ……。どんな事よりも……一番痛いんだよ……」

「……」

黙って聞くだけの自分に腹が立つ。何か言うべきなのに、『行くな』って『他の方法を探そう』って。……言えない。

「……行きたく、ないんだよ……」

彼女の細い手が、俺の手に重ねられる。冷たい。昔はもっと暖かったのに。

「……っ……やだよ……。……一年だけでもいいのに……。……君と過ごせるなら……。残りが一年だけでもいいのに……」

始発電車が来るまで後十分。

気付けば、俺は立ち上がって彼女を抱きしめていた。今にも折れてしまいそうな身体、香水じゃない何かのいい香り。

「もっと、こうしてあげたかった。今、後悔してる」

「……っ……」

「いっぱい、好きだって言えばよかった。いっぱい、キスすればよかった。いっぱい、愛してるって言えばよかった。後悔ばかりだ」

そう、後悔ばかり。だから、決めたんだ。『行くな』なんて言わない。『他の方法を探そう』なんて言わない。その代わり、決めた一つの事。

「お前が帰ってきたら、今思った後悔を一つずつ消してくんだ」
顔を上げた彼女の涙を拭ってやり、唇に一つキスをする。

「だから、一年でいいとか言っくな。ずっとだ。痛い思い出なんかより、ずっと多い楽しい思い出を作ろう」

「……うん……。……うんっ……」

始発電車がやって来た。キッツと喧しい音を立てながら。電車が止まり、扉が開く。彼女がカバンを半ば引きずるように持ち、乗り込んで行く。

「さようなら」

につこりと笑う彼女。目にはまだ涙が。

「じゃあな」

扉が閉まる。彼女が手を振る。また涙を流す。

走り出す。彼女一人を乗せた電車が。一番高い街へと。取り残さ

れたのは、錆びた何処までも続くレールと、泣き崩れる俺だけ。

昇るなど願った陽が、優しく抱きしめるように俺を照らしてくれるのだった。

-
-
-
-
-

月日が流れても、田舎町は所詮田舎町で、何一つ変わる事はない。

錆びたレールも、一時間に一本の電車も、自動改札のない駅も、ボロボロで塗装の剥がれた青いベンチも。

昇って俺達を照らしてくれる陽も。

「本当に公園でよかったのか？」

「何で？ いいよねえ？」

「ねえ〜!!」

笑顔で微笑む女性。白のワンピースを身にまとい、黒のカーデガ

ンをその上から羽織っている。その横、女性と同じ格好をした女の子が口の周りにご飯粒を付けて蔓延の笑みを浮かべていた。

「いいならいいけどさ」

「公園で十分。十分」

「そー！そー！！」

月日が流れても、田舎町は所詮田舎町で、何一つ変わる事はない。

でも、唯一変わったとしたら。

彼女が今も生きて、幸せそうに笑っている事だろう。

俺の後悔は、なくなっていた。

END

（後書き）

おはようございます。コノエイクノです。

意味、分かる文章になっていきますでしょうか？（汗）意味分からん！！と言う方、大丈夫です。書いた本人が一番分かっています。……ふっ（え？

誰か、文章力の付け方とコノエイクノという人物を教えてください（汗）
こんな

駄文でも評価や感想を頂けると嬉しいですっ！

では、また。

コノエイク

ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4583e/>

大好きだと言える幸せ

2010年11月21日04時21分発行